西洋小梯獨案

上

ISSEIDO
東京 神田

（主勝河ノ十九）廿一ノ言 廿二ノ言 ゐど平ず女字音ようるるるへれど、屋代物語ふどに
男一ノ言 男二ノ言 ゐゐ男は考ひうむべくゐゐ男は考ひうむべくゐゐ「ゐゐ」ひとと一の言ふごと
ゐむべくれば女も古ひるんゐ一の言 るんゐ二の言 ゐゐ「ゐゐ」ひとと一の言ふごと
ゐ字考ひうむべくさ「ゐゐ」ひとと一の言ふ

文庫
川氏之記
須賀廼舎

源氏物語のちりぢりにまぎれ
うしとあまたさはりのおもひ
けるとゐるきあり世ものあと絶も
ゐるかの物もこころもをのゐ殘ゐは
なくとゐるこのてまちはきふも
あるものを詞（コトハ）の玉緒あこのゐるもの
ようをけるふを狂いのみるやおの
ゆることもすゐふこのゐあのぬるとお

源氏物語のちりぬくまもなくやうしとあまたはのうらのおもやけことゝなるまゝ世ものあと絶たる跡の物もことゝもをかゝる跡はなくとゝのあつてまゝはきふもあるものをことゝ絶あつてゝのようをとけふを狂いのみやおやゆることもすくふこのゝ人あるぬゝとお

竹内文庫
須賀通夫蔵書
ISSEIDO 東京 神田

ほうなる筆にまけをいかに年経る乃
天そのかゝ乃ん者とこの世みゝし
なるをちとゝにまけ給ふ玉のをゝし
をとりいそ給ひてゝう世ふ世物語も
てあそ人のとりこるなくなんを
者るさしとゝはこの世物語をゝ
とゝあかゝ給へるものゝはあるを品お
しゝるゝ所こゝ給いる

ものゝ中にまけ給ふ世ハ物語のとゝい
ふへゝ乃ぬを雑屋の天この世伊勢
物ふゝるゝ物語給へ教ゝ　とゝあつ
免たゝおきゝ給いてふゝをゝ世こ由やゝ給
ふ味ゝ世ぬゝ世下の心ゝゝ世者
ハゝくさゝとゝわきまへ給へるハこのいあ
ゝなゝ者とゝへゝ者おゝのゝ今世事物ふ
ゝゝを世ふゝゝなゝ給んとゝふゝを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文政四年　八月

醉庵園　森嘉基

源氏物語玉小櫛補遺上巻

桐壺巻

鈴木脹著

まつまうのかゝせのふ　四のむら　右　森嘉基云、のゝひとありしを、漏るるるべし

あやしとうたてまつるものへるを　八のむら　左　てゝ小脱あるべしと、故大人ふさ

きにきゝるを、小様よハゝきまうり

女房もゐんおちぬ　七のむら　右　おの一のそこの女房ハ、えしに、疑へるに應ぜり

ゐうしろぐち　七四のむら　左　さち、漏るべし、さふらふ人、ゐうしろぐちて

ゝ、せまるまうり

えもぢあへ　七五のむら　左　おのもづうしげなおぼすまをよ應ず

かしづきまふ四の君　七六のむら　左　まふよ句きるべし

ふるのう（世一のむら左）れひかうの主ゝて、紐のかハ垂二のそろあるべし

かゝる所ゝ見ふやうある（云云）おろ〳〵とする（世二のむら）この語勢すでゝ結びの

さまあり、かくて又光る君（云云）といひて、前の文のこまゝどを引き、又

次の巻の書出しゝゝつゞくやうゝゝて結びゝるさ法いたんゝるおく

面白し、この結びゝるやう、源文まて八九條の、七月之卒、章、蔵レ氷

之道、孟子の、能言距揚墨、あゞふゝくまゝゝすべて此書、巻〳〵の結

びゝ皆こゝろまゝゝ、味ふべし

帚木巻

いひけゝれ後ふとゞ（一のむら初行）此とゞを、師の好色のとゞと解きさる

ハいゝゝ、好色の外のゝゝゞあるべし、かの須ゝ流されゝふ時の世の風説

も、好色の色ゝのこふハあゝゝざりしゝやうの表ひあり、若好色のこのとゞ

としてハ下れいゝゝゞとつふ紐史えゞゝ

ふゝびゝふおうしゝ切ゝふハふくて（云云同右）見ハ巻〳〵小ある事をおゝ

えいゝると因ゝまゝて、源氏の若れるをかくいふハ、所作者の異下ゆて、

この拍板の作ゝざまのゝゝさおくおうしゝゝぬゝしゝと下にことゝ

ゝるゝあり、かゝの〳〵ゆゝおの物作又いせ物語などのふりとハかた

まるうしゝあり、されどそハ、ありてゝゝさと考作ゝゝるもの

ゆて、拍のいのれを作くしゝて、えゝる人のゝふふく感ずゝゝ

にせんゝえゝるゝゝ、小様の物れ、大む後の所ゝゝゝれゝるゞゆしゝ

女ゝてえをゝまはしゝ（八のむら左）江戸人石川雅望ゞ源注者滴に

云。この俤いづくよにのりてゝ。皆その人を女にしてといふなり。
母が女よあるゆゑあるべしずといへるをきれど葵の巻に女をしてハ。
すてゝ。ぶくちゝんたまひ。少とまりなんゝ。又桐の巻（廿九の紙）に。
義童代文の京宮の内をバの殆ふるまひあるゆゑどとゝれバこの俤び
ゞとなり

かゝちきゝさなげなく（十の紙右）皆よりもてかくすなりとなり
でたゞ一種の女のさまなり。傍注に六条院を指てゝ。ハすたゞ
へて皆より本妻の女の都といへるもよろし

よろづのゆふゝへておがせ（云云 十五の紙右）この作者てを思ひ寄る故
ゆゑ。古記抽俤ふあるやうの。在よ所の中に異やうなるゆをすべての

せゝ。あゞをゆれる人の心世中に常なるべきゆゑなのことをよてつゞ
ゆてさんがゆめゝ。中に不足なくゆれ。紀八。城に上ゆれ
ざなり。このたとへハ下ふ事をこ考るゆゑ。たゞさゝでもゆ
ゆりかゝるんだえあれバおのづゝことゆのおうゝるゆ
おゆふ移へ侍る。まち。考のゆ（十六の紙左）侍るハきるく紙ふあゝず。下へ
侍ゞく意也

いとゆるゝ。ぶく物ひ侍ゝもうるさくて（十七の紙左）侍ゝハうなされ
どなるべゝ。さゝでハ次の文ふ又後のたゞけよく紀方云云と
なるふもゝゞ紀抽あひいうゞなり
こゝろをさゝんず（十八のひら右）上のんをさゝらるゝふ意ゞ

筆はしをを般涉調小（廿四のひら 右）　乐のすゞ。般涉調ハかるまづこゝろ拍
ありさるゝ因てけ女のんさまに元合せて。今めらしく云ことゝ
おもは
さてその文の紐ハ（廿六のひら 右）　けゝ紐ゝて。中ねの右入て。ちばし拍をもえいハざ
る伴のゝ〳〵ゝるくハ。面白ゝ。の紀ざまあり。かの左傳の有弼后羿。晋侯曰。
后羿何如。とゝ。ある所も見る同じ。左傳の注ハさらにこれを引ゝ
ぬを。式部ハ才子なる故ゝよくさとりてうつし取たるゝやゝ又ハさら
ずとも。才子どちの心ゝぎハおのづゝ符合ゝ。けゝ乃品定
も皆論のこゝる中ゝよゝとよ有しゝの昔紀のなるゝけゝ限
てほゝつゝくゝるゝ。そのゝらゝけ一段を挿こゝれてほ

の半〳〵の伏脚と云ゝるゝとおもしろし
くすしかゝん（廿八のひら 右）　年山打空一ゝ。宇治拾遺二の右近拍監下殿厚行
云云。拍いこしくすしくいむやつハ云云いゝく拍ゝくすし紀ハ云云を
引てゝれゝ合せてゝのくすしを講ずべしといへる
何ゝをゝりゝさんと（同）　赤基云。どりゝさハゝ上ゝるといふわどの紐
ゝりけ拍紀ゝる。紀の拍紀ゝるゝ。ゝくゝ入ゝゝる。ゝゝのこゝりけ
くゝやまひゝる所ゝ。ゝでゝらくゝて。ゝゝ。（廿二のひら 右）　女房ゝ拍ゝ
ゝきんといゝせゝゝバ。とゝ
ゝ紀ゝたらゝ（云 云 廿二のひら 左）　ゝれハ。後壺宮をさせるゝ
拍け紀ゝる（廿八のひら 右）　赤基云。ゝれゝりゝ君ゝ紐ゝり。拍け紀ゝるハゝゝけて

扇を同ふやうの時の絹あり。猫衣扇袋二のさてく。先おまへ中さんとて。
立ちーまて。ゆーおといとおどろくーしう。ちらぶれらぶ道中
より扇げ猫なる姫君のおまへ男いりふーて待り。いぐつろ後
つーんとする。といふまぶえのいとる紀ふ云云取りくたや扇袋二のさ
ーうてもの扇げ猫なるとある夏ようちおどろ紀てえんなげ猫
へもてぞ。あぐある時ぶにいとぎうもづーげよ。おぐろけの人みえ
みく紀を。まいて君ふんあり。うちほくえて。ごもハいぐぐーんず
京云云ろれーまておもふべー
ねたうんーくめても左世八の巻ら絵たう出てきるべー。ねーう。あぢ紀る
くと猫く心あり

ゆるーとうハさくざをりあり右世九の巻 光ハ草子地ぶぐー。源氏の君のん
ふありていへるあり。あのの火かくげあとすべーとあるも同ー。すべ
ていたぐひ皆作者の時世人の心よりてかける故ふおのづーよむ
者もまのあーうり又るぐぬくふおぐゆるあり
ふかいとあさまーきに四十一の巻右 ちぶ。下のふーくあさけあく云云
へつぐきていとあさまーきーうりーて。出様の絹あり
ふーたまへ。ア云云。又ときこえよとの給へバ四十六の巻右 こーふ至りてがく
け女君をあげまへいへるハ。源氏君のは思ひ人とありーよりてく
かろくーー紀名さへとりそへん分の覚えを四十七の巻右 そへんまそきる
ゆろーー。覚えをまてきぶべー

空蟬巻

おぼしてうふくると思ふよ（二の巻 左）　くるの下ふ。よれ字をそくてんはべし。

けれ不〜ふ〜〜。少〜もてゝをはの誤又字〜侍るあ〜べ

そこハぢよりそなゝ〜ゑ（五の巻 右）　持ハ今俗よりふせきのすあり。唐（モロシ）の碁れせ

ふゝえ〜〜

ちづまをぬあり（六の巻 左）　光源氏の絵とするを小根よろ〜しとせ〜

をてるといで

夕貌巻

かの夕貌のちるべせ〜陸奥ぢうり（五 云 左）（十五の巻）　ぶの夕貌のあれ不とあるせ

えるふい〜ちせ〜じと思ふこのあるりのさまをてハ此陸奥を見〜

つを侍ふまいとつぶう〜。此陸奥を見とハ。恩源氏の君とハ志〜侍べ

きこと有り

垂れる〜かるハ〜ん〜ゑとも（云 云 右）（十八の巻）　夕貌のんさまをいふあり。湖

月傍注侍あり

おう〜と思〜あて（廿四の巻 左）　おか〜此あるもあ〜ねど。千人をうつく

し〜侍ふ所よおお〜〜あ〜〜をておう〜〜とき〜侍ふとあり。俤の化者

の異下あ〜〜。又その中のむつまと〜此をもち〜せ〜ろく

名波あくありまるる所ハ侍るて（九五の巻 左）　湖月既書。第子地と見る説

よ〜。さて八所の字侍ふあ〜べ。嘉基ハ云ごゝ夕新の上れことのつまへる

あり。源氏君よ夕の上をうちまろせてさそひのふまゝにてもおくれ

う野雉とも名付たるぬをんのうちれへぐてとハのるまへるゑといへる
世中のとあるゆゑと 廿二のむら 左 かくるゆもとつふを暑紀るあり
おほ山蛍の居蓋 廿四のむら 左 式上ふとでとつふ紐あるべ　おちるあるん
かーこくもとめ 廿五のむら 左 茹基云小椎いぐこのうーこくバかるーけあるーのき
とハ是ゑおろうある波ぞ神ふ多ごいへるおろうのうーあり保勢物語ふむし
をとこ女いとかーこくおもひうちーてごんふうりあり又同書昔かや
の又ことナこおハーまーあり是ハ女をおほーめーていとかー
こくめぐこつうう結ひあり太和物語づこの中納言のきこナ三のみこれ母
ゑゑん布をうちにまりあるもーめふえうどハいぐおほーめたらんなど
いとかーこくおもひあぐ紀結ふありあとこのかあまこあり

うちかちー結へアーが 四十のむら 右 がもー衍あるべ
おほーあけくめ尼 四十五のむら 右 めりーとつふてにをはハ細ハず かあ
ず保あるべ
又ーー人のありをまこと 四十七のむら 烟と書をといたでかくいへるおうー
いけるかひあ紀や 四十八のむら 右 さやハ物をとびいぐん紐てよふ同ー紀や
ありもーあぐきのや又問詞のやあーバがひあーやとつべ
又こことのむに 同 蜘の網の縁の詞あり
あやーやいうふ見ふらん 同 左 あやーとハ根あーく又ぐるーれやーあるす
をつふ紐てし女の破瓜のすをさーてのまくりさてそれをおねのが
うふいぶかーく見ふーんと見ーめんたえふ根のとれうこまてハけ文

意いまゞ〳〵ゝるゝ〳〵

頼文つくゝせ給ふ 四十九のむら 左 草稿をかきて人せまひて出さてさりぬべ

く取つくろひ〳〵むべ記す〳〵仰せ〳〵をつかまり下ふたでかく

あゞ〳〵 云云 とあるうてもるべ〳〵

哥 ゑ〳〵〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ 五十二のむら 左 是も出雲と夕点とをつかはまとり

あゞ〳〵紅の面八九月重ふ書ゝ〳〵秋を重ゝ〳〵といひふ立をそられ

ぬる珠をゝふ別ゝまといひるるありさ〳〵でハ立をのまをいへゝ〳〵ふ

〳〵ふ八十月ふありてのまり細流のれ仮をゝ〳〵とすべ〳〵

ゑん人さん 終のむら 源氏君ゝ重ゝ人をゝん限まの女をさゝ〳〵ほるべよ

記人のことせんハめのめめがちくとあり小橋ふハ記得〳〵れゝ

おつるのゝちひ 云云 六のむら 右 産業のまり

法師まさり 同 桐壺巻ふあげおとゝとつふ紙のれ出て法師よりて

ゝ人〳〵のまけゝて人ゆるまをつふるべ〳〵

〳〵垂にの〳〵ゝまりまふ光源氏 十のむら 左 〳〵紙いゝ〳〵の〳〵ゝ〳〵ゝまふとゝ

ゝまり仕るとゝありしを混ゝまるゝの〳〵ゝるとハが〳〵ゝ海〳〵く評判

ゝるをつふゝ

なのかし〳〵ゝまるゝまり仕るとハ 十一のむら 左 るハまを倡ゝ

いとをし〳〵ゝ思ひまひ 十二のむら 右 思ひまへくの倡ゝ

おとゝまるゝまり給 十五のむら 右 給ふるゝおとゝ仕るゝおとゝあるべ記ゝあり給ゝと

なるハ俱あり

紙のようどうもまさりて 同 よどころ〳〵ハ用あり。是ハ少とくこを俱を俱を

るるるべし

ひらぐ物なられと谷のそこまで 十九のむら 右 すべて玄中よりぐ物となるハ皆。

今世の双盖の丸着とゝ物の新と又ゑゝ。これハの紙を又てもまぐし

あらぐ佛まのし法堂まするゑ俱るゝまん 同 十五オ 須ハ。廿日ハの比ゝ時刻を

いふあゝぐ。仏法ハ物表のつとめありとあるハたぐり。さてハ次の紙と

手後せり

見ひるつもと 廿三のむら 右 見ひるくつもどるべし

見もぐ 廿四のむら 右 小様の法のごゝ。さて上の見ふるもちゝ見ゑ 云云よ

是すべて皆添の内紙あり。小様あやまられり

いうでうのぞゝハ見くもひつゝん 廿五のむら 右 かのまゝ出てゝ。小様ハ移へら

んとあるを。をゝとせゝもゝるハいうぐ

さだかりいそけあり。けもひを 廿六のむら 左 ハ下よどすぐ為るべし

くもゝくおもゝの移ふさ俱 同 くハゝくハおもゝ。ハつゝぐ。下のう

るへかるあり

あてもまた。あふ表まれある 廿八のむら 左 又あふ表のまれるとゝ。表の今世の稀か

ると。二ゝとようけるる紙あり

いつゝもおくけゝとゝぐる 廿二のむら 左 るハ。の俱あり

故ゝやすゝ所よおられ 廿五のひら 左 ハ下ハ内祖母どちゝて。少故ゝやゝ京の母見ゝお

くれまう給へるまを思ひいでまふべき紀まあり。母君といふまあるべし。かの侍従のかくれまへるハ源三歳の時まで生れまをさまる紀

人ハ行ん方なく云云とあれバ思ひ出まふべき紀まあるまあり

四十九のむら

ゆくちハさしてをあまて云云左 下への詞のつゞき紀ぞ女城小源氏君の内

くちをしくるやうにゆえられどこれハ少紫の上のうちをしふべき紀なく。

きれバきうくまその下に落る詞をとあるべし

末摘花巻

二のひら右

けしき紀だこと 俗小氣持ゲあるといふまを紀あり

同左

袖の紐をとぬゆうに 源氏君まを。紫の紐を引ぬゆうまあり。湖月

笑をてあげる説。ろ〜

例のへぐて守へまを紀ぬんまて

十のひら左

こまハ中ね君のこうけてえるべし。傍

注ろ〜

十二のひら右

おぼし〜ろそれずの給ふ 夕良の上といふ紐をおくてゆくりあ紀

ゆうあまど姫の出出〜小意じる紐あり。下れうのきぬとの音を

同じ

十四のひら右

とゞ見給ふべ紀人を 一本人をあるとあるべし

十五 同左

いとつまげふおぶ〜られど 代どをパ。次の爰ろを考うたまを

十六ウ

ざりをとパのパをどゞ改むべきうう。小様よあれどおのまハさを思

きびかのまくゆてよろんとぞ思ふ

斉

おもこをるハ 十七のひら左 暗唖オシをバ。比すでまおくといひてひみるう

ひるむつきさをあるうえをとるふ 北五のぶら 右　をまは晴ゝ腫よはあゝ〳〵れ下ぶち

とゝくるまてあるべゝ

むの毛ふいでゝ 北八のひら 右　はたをハゝぐ目鼻のえかゝり

まけてやこゝゝるふ 北九のむら 右　まけてハ負てゝけゝぐ沼るハるろゝ

けさゝゝぶつすぢあるんやすれあの 同　けさゝゝだつすぢるれ故ふ今ぬゞ

んやたきあり抄あやまれを

くハや 北二のむら 右　是ハやの表るべゝ すハやハそハやゝす奴ゝそやつるんと

見ハるゝ故あり さてこゝゝまその意俗ふそゝやとゝふ紛のごゝ

おぞぼむゝとゝるゝハ 同 左　命婦ゞ猶るゝハあり傷泣細の比説ゝろゝ

さゝゝゝるきえゝゝ 北三のむら 右　はゝ下るぞゝとゝるぞんゝとゝあるべゝ

けをひうちそよ矢き 同 左　そよめ紀こゝまてハる紀やゝるんゝとゞゆ

○作ゝ物依の紀若の心表造化の神表むすびの神のゝゝまをぬすゝ用て

上まわどゝ有格ゝく仍ゝゝ源氏の君の夕貝の方にあひ待ひゝハ不ゝふ

るゝまておゝゝくあゝれありしゝ帚木の巻ふいゝる紀ふおのづゝゝふ今ゝ

ゝゝそゝゝふつけて又ゝるるゝまゝんゝとんゞけて求めおひゝふゝひの外

ふ末摘のやゝうゝる人ふゝゞ孫あゝゝうゝおひゝハかのゝろこゝの該ゝ方事不

典人計較一生都是命安排とゝくるゝ同ゝ紀ゝ巻ゝも又夕貝の如く

ある人のゝをゝ紀ゝゝを何の奥もあるまゞ紀ゝをとゝゝ格かゝゝたる

紀ゝを移ゝん紀ゝの格あゝつゝゝ若ゝいゝく一年のゝ一生の間ゝねて

のあゝゝまゝ皆ゝゞひゝゝとゝゝをハおのづゝゝたゞもぬゝゝものゝハいゝゝ

物ハ定めがたし。たゞ不定とは治ぬることまでたがふなどといへる也。紫
上は始終源の光をしるしたるまでなるなどは説まですべて世中は事を
みくらべしとまで讀者の作りし事なれども見ま志むるハ是上手の
手段なり

紅葉賀巻

源氏の中将大とのゝ頭の中将 二のひら 右 かく改めてかゝるハお腹やけの人にて上り稱す
る意なり
うちそゆくしとの給ふ 三のひら 右 孟又細に許のとまらしとの給ふ心なりとあ
るハいかゞさることろハこゝろえず
そなり 同 左 こ無こめかしのこまで子なるべし

かいまみ 四のひら 左 三四十人の人立めぐりて笛ふくさま舞人のためには垣の如くなる
故にかいまみといふなるべし
いとゞかの弓箭 六のひら 右 いとゞといふこと下のおかしきへかゝれり
をさな紀人ハ見ついすふまじ 同 左 見つきすふなりとて見ハあひゐるきづくと
いふ詞ずつく俗らひつく又俗説ありつくなどのつくなり
むこになんどハ 八のひら 左 一本にむこにとあるぞよ紀
なとろいしさしもとなしハひのまふ仏んの 十二のひら 右 まふに白きる弓
し。なしハいまふ仏んとハ源氏の君を又仏んおどりまふとなしハ
給ふをいふなり行兄抱從にかくたゞしくやハなしハすべきなしハし
をバといふハ書使なり

ミすゝ　十三のむら　左　ずゝ　濁るとゝ

人のことなるもあやゝかまつる行のあやまちを　十四のむら　左　侍従非ちり

けるハ若紫の巻よりなり　義壷の宮ありゐ給ひて　一さび月すゝありて　なに

懐妊ゝすゝゝをいふなり」

んゆゝぬゐ　廿二のむら　右　葵の上を　源のんゆゝ記ハおぼさぬるべゝとゝん

ゆくとハ俗ふ存ずるといふことなり

そゝ記をいひふれるふよハ　同　左　帝のあり　同ゐるゝまやあゝん　同　官

女性さるゆふ同ゐるゝ故ふやそれ　合せて八子の源氏の君ハとあり　抄の

説　文義つゞかゞ

すきんゐゝと考ふるてゐやむ考るを　廿四のむら　右　内侍の如記官女性の源氏の

君をゞとあり　侍従めりとゝふ初ふゝゞ　きハんゝどすゞきゞ　とゝるハ

内侍の源氏の君をゞさてハすゞ記ゝめぎりるハとあり

ゝまほゝきハ限りあり　るをゝどや　同　左　一本ゝすゞふ記を小枝よりゝと

せゝまてるハんゐず

こかゝくゝと　廿七のむら　右　こゝすゞ清てるむべきゝ

おもゐのさまや　廿九のむら　右　おもゐゝとハ面皮の厚く　祇ちゝぬ心をゝふ　古ハ祇

ゝ面目を記ゝをゝへるゞ　後ふハ祇ゞるあり

いとゝゝをりゝ記ゝとげ　廿二のひら　左　いとハいゝとゞあるべゝ

花の宴巻

ゝゝとのハ　二のひら　右　小枝小云云とあきゞ　今ふよ下の句ふゝとつゝりまふとあ

るを上へめぐ〳〵てそのそこといへるなるべし

つぼ小臣中ね云云同 人の目うつしもるべきなりと中將のんふおほゆべうえ

まどそをまふつけて注するんもあくとつふこまあり

やすぬるなれどくるしげなり三のむら右 げにぬ星の古流ふ〳〵やすきなり

上のはる〳〵とくもりなぬ庭ふ立いづといへるをうけくるしげなりハ上

のをづうしくてとをうしくてとをうけくるなり

源氏のおやん同 こゝまてきるべし上の紅ふゆづまて舞といふことをとぶぬ

ふ侍なるま

やをゝいぶぬおろして五のひら左 上ふやをゝのがまを侍ふとあるをかへまとろべ

し侍なるなるべし

ふこどもきやうざくふ十のむら右 きやうざくハ菱菜なるべし詩文ふ秀逸の佳

句あるをつふ上の若菜の毛十のむら右 ふとかけまどいときやうざくふと

あるおどハ侍じるなるとうくるう

おきなもおどく舞出ぬべし同 續日本後紀美和十二年正月丁巳天皇召尾張濱主

於清涼殿前令舞長壽樂舞畢濱主即奏和歌曰於岐那度天和飛夜波遠良無久

左毋支毛散可由留登岐介伊天豆萬毗天年天皇賞歎左右並涙賜御衣一襲令罷

退この歌の紅まてうけるなり源氏君のまゝて栄ゆく春ふ立出させ給へらまし

ハ云云との給へるもこの歌の紅なりと嘉基いへり

おほやけごとにそゝうなるなの師とるを云云同左 かゝる者ふかゝこと紀者なるな

世のなゝひなり此作者世中のなる給をよくもまるな如此政ふあづゝゝん人ハ

こゝろつくべけるなり

女こたちかどを（十二のひら 右）小根よ（云云）とあまどいうぐあ〜ん天子居下の子をこ

ことの移ふるあるやいとおぼつかな〜

さ〜もあるまじきるあまどゞ（十四のひら 右）湖月或説ようろ〜〜きこゆ

葵巻

かゝるもの〜ふる紀ぬう〜（二のむら 左）源の心中とつ伝う〜

そまふ方〜ぐひ〜るさまふ（四のむら 右）小根よ（云云）といもれ〜まどきて八よてか

〜とふる移うあ〜ぐ細の話説ぬるべ〜

斎宮の話〜の話点有（七の丸 右）こてふ今き〜かく〜ちゆふ八弟子地ぬぐ〜がの

ごぜんの人〜のにより申すんゝよりていへるあり此ぬ〜ゝあり

こたてまつりあげるも（九のむら 左）此下小抜あるべ〜小根ふ（云云）とあまどあり

とふるをとぶくべきゝ〜ぬ〜

〜ぐそまるれるさま（廿一のひら 左）内裏ぬるゝ〜をの移ふるをとふ傍注ふ

もごゝふとて（廿六のひら 左）花を伊弉諾尊のいさなぎこのをるふおろれ給う移へる

ふることをとゆるあるべ〜書紀の注一書ふ角二畠頭邊角二畠脚邊とあ

るを古へこまゝ〜べふ〜〜ゞひとあとべふをこゝひあどゝふ〜〜あるべ〜日

本紀式部とし作者をつくるふ〜ふけ〜ぐひのゆのあるを此てあるべ〜

袖の上れむ（廿八のう 左）人の子を掌上珠とふ漢語をバ〜ぐ一ゆドをうへて此國こ

とだふあ〜〜るあ〜

こぐうがハ〜紀ことをゆ〜ゆえ移つ（廿二のひら 右）一本ふきこえ出てとゆるぞゆ紀

ホーのつま戸のかららん 同左 高欄のもゝをあてゝるまいゝぐ。こうらんまて匂
欄あるべきな
さのまれし 廿五のひら右 さるまれそいふせと。河海よあり。又たゞまさるものゝ保と
をすべし
とう紀くゝハゆゝ。ゑむもあるべし 四十のひら右 うゝく目をねぶりて。めを表ゆり。後ふ也
良のをう紀ふりてゆう。細の内説たゞ
神巻
むうひだゝ 十八のひら右 むうひ妻の腹とふ。をるべし。むうひ妻ハ嫡妻あり
かうすぢとホ 同左 こもゞ。渇るゝろし。ことハ異也。下のおゝ。ゝとそのこも
ゞも同し。おゝ。ゝるまてあり

ほのゝとをしふる 云云右 廿のひら あくるふつけて別を燃むあり。憤沼飽ホいひう
くゝといへるハひゞるあり
思ひやるもたゝあゝゞ 廿二のひら右 るハ。ぽう
たう月の色もうつろひて 廿四のむら右 紅葉よあゝまる詞あり
そゝゝ。ぢひのふゝの 四十一のひら左 小振ホ云とあり。腹按ふ。つゞ。後ふ
まてもあるべし
宮のゆ たうだう 四十五六のひら の間 宮の内素まて。臨時のゆ加恩あり。ゝうだうハ
たまゝうあり
白虹をつゝぬけて。太子おぢゝう
ぶへるまゝとえゆ 作者本書のををずこしんはた

花散里巻

とだるものゝ（五のむら 云 云 左）とだるものゝ持ふとハ作者の意を異下ちる意へよハ是へとハ古歌を橘ふて人〳〵のすゝれるを見て思ひ出ふ

歌の意軒のつまとハたゞ橘とのことさ〳〵むらひとあり橘を添に比〳〵たる意あるべ〳〵

おゞさぬるふハあ〳〵ぎるべ〳〵（六のむら 右）草子地の詞あり次よそのすゝをい

へり傍注ひがことなり

須磨巻

と思ひすふる城ちん（七のむら 右）城の字術あるべ〳〵さ〳〵ぞハ下かゝ〳〵う思ひすゝ

付るゝどあるべ〳〵

いとおゝ〳〵ろ（同 左）こゝまて句きるところ〳〵庭にゝてきるべ〳〵

ところゝくて哀のこつ（九のむら 左）せぶ下へつゞけるむべ〳〵

ふとゝろ〳〵そう〳〵（十のむら 左）色ゝろう立まさるゝもあるとちんまでハ源氏君の紫

上よの持ふ辞あり〳〵中ふ父ゝこハいと（云 云）ろう又ゝこのゝ〳〵き人をあく

までハ草子地ゝろかのことゝろぞう〳〵げゝよぞあるを色ある色ある橋ある

といふゝを釈〳〵ゝるをやゞて源氏君の色紙のゆ〳〵よ書ゝ〳〵ゝるゝあり

たゞかゝくおゝひうけぬつゝふ（十六のむら 左）たゞハ源の色紙よあ〳〵ぞ上よつけてき

ゝてゝるむべ〳〵下ふとのゝこゝゆゝえ持とあるをゝるべ〳〵

月う〳〵ゝてあちれゝめてゝ〳〵と（十八のむら 左）孟ゝ源の古歌を感ずるゝゝと

あるハたゞゝゝを上よとの持ふさまといひて下よゝえ持るとあるをゝ師の

いたれつる歟〻すべて氏物語のある歟をこゝにぼ考せ〻るなり〻これ作者の用意なり

つゝふう紀名のゝ 廿九のむら 右 つゝハ苔世の罪ふて俗ふ因果なる氏名としてふ云なり添氏君の紙もかく侍るまゝふべ紀とハたゞひて後来の後もいつゝとなく〻まぬつゝふ

紀名との移ふ事なり〻あほの紙をゝえてもるべ〻

意ゝ〻むて 云云 右 世三のひら 意ゝ〻びてなるくねとハ琴をさ〻ゝ号ふ方の凡とハまつ

凡といふ事ふ上ふよもの嵐をきくゝるふとゝ侍り〻行平々の松とゝ〻きゝハとゝ〻

みるひ〻ゝ例もあれでなり

ゆゝるゝ 世四のむら 左 ゆゝるゝゝの俱なるべ〻

いとゝまゝふなる程 世七のむら 左 仮注ふ一任の間五ヶ年とあるハいくゞ路の程をいふ

ゝゝゝきこゆ事

こゝ事ゝれまでき向ひて 同 こゝ事ゝれハこゝゝゝとゝふ因〻〻までハ近なり

仮注あやまゝゝり

ま〻てをちとまゝぬべく 世八のむら 左 をちハをちくゝのをちゝて〻あとくゝち

かへるなり

おをやけのかゝ〻じなるゝ人 世九のむら 左 かゝうハ勤ゝて〻ハてにをゝなり

ついきゝゝする。同 きさいの宮の氏神ゝゝれまでなりるゝ〻じの下ふゝゝとゝふ

神をゝへてんはべ〻

こゝゝへゝゝぬゝゝもゝべのゝへをゝゝゝまひ 四十のひら 左 こゝまでまで一句なりゝ

ハゝひの俱なり

まーていうおつるん 四十二のおもて 我男の身ふてかゝる往すあるだふあるをまーてと
あり。牡丹花説とてあるハあゝとつを示たゝべつを
めでゝ〳〵のゝおほえ往へバ 四十二のおもて 一本おゞえ々まバとあるもよろれど往へバ
もあーかゝゞおほえハ品ハ丑ゆて。源のめでゝ〳〵のゝおもハれまふとつふす
おまだあり
くーいとうて 同 左 くーハ屈ーあり。いゝゝハ埋まいゝ〳〵ゞどのいゝ〳〵て。
屈するゞ痛く品ハるゝあり
れぞどもづけきせすふをいけるかひありと品へつと 四十六のおもて 右 づけをあゝの
縁倍といふハとろーーづゝくゝづけといハでハあゝ小縁あーーいけるゝひのと
を縁語とすゞー

いつまゝ對面 云 云 左 四十七のおもて 源の河とふ傍注ろろーー宰相の古河あり
さりとるかくてやハ 同 山下るあまをそまふべきとつふことをゝくてんゞべー
うゝの面をゝうゝくとあ況ゝとうてゝ。ゝくゝもゝゝぬ小 云 云 左 四十八のおもて カゝゝ歌
小心隨湖水共悠々。といへるゝとろかゝくゝ

明石卷

波風小さゝとゞさまてあゝど 二のウ 右 一本ゝぽんぽくあるを小樣小ゝーとせら
まゝれど。今品ふゝあゝどもあーくハかゝード
かくあゝ〳〵身をもふゝかーつるゝや 同 左 ゝやあゝんとあゝたふゝ古
くハあれゝ〳〵を葬るゝをつふさけハあちてすておくるゝある故ふ軸を
て竄死のゝまゝもあるあり。今ホオルとつふ河もゝの軸ドゝるあり

んはそさまさりける 四のむら 右 んかそさでとあるべしんの上ぶれの
字為〜〜
奏すべきすあるにようてゑん 七のむら 左 でもじおきなのあるを小槍よ
〜〜とせ〜〜まてれどあるもあ〜〜べ
う記てかくこうろこび 十二のひら 右 入道ありぶ槍よ云とあるハいうぐ下よ昌〜〜
さ〜〜あがってはのうふ又をするとなるハ的をてぬ程ハ〜〜くてゆ又をまら
ざり〜〜ありおのうとさへい角るふんを身べ〜〜か〜〜こまりてある物を
ぬるきぐふさぐうふハ沼又を〜〜ぬあり
月ろろのれすまひうハごよあ〜〜ぬ〜〜うよ 十二のむら 左 すまひハ須戸よよせあ
き〜〜ろを明石ふよせる紐あり

さぐあるうハ拍哀あり 十五のむら 左 ゆげあ紀ゆとも思をぬ程少てぐに
意るうハ拍哀ありとなり
かう書〜とふまを 十六のむら 左 廣陵散あ〜〜ばくロ〜〜書〜〜と書べ紀を
かふちくるハぶ〜〜又廣陵散をくロ〜〜書〜〜とだうとも〜〜ふべう
らぐ又廣陵散ハ稽康まて絶さうと云伝ふるよこるふ伝ふまるも見
宋あ〜〜外ふう書〜〜とふまのあ書〜〜ゆ
すぐ〜〜ふひぬさるよ 廿三のむら 左 折う〜〜麦あまバかくいへま
そうちぐう紀きまあ見るゆ 同 ぬすぐ下へのつぐ紀いうぐまて疑ハ〜〜ぬ
のあやまりあんう
よこりてすぐ紀年月 廿八のむら 左 泛ぐものあ〜〜きるハ小槍よ辨ぜ〜れ

るがごとくされどおろかなるまでハ世ゝの男女の中をいひていまゞ人まあハ
ぬ程のまをいふと世でハうるさびたゞとりひのまけゝまハあしび河の
ゝを畢竟同じ
荷ふる浪小云云 四十一のむら 右 明石上のうゝあり
とりくゝしまの中も 四十四のむら 左 とりくゝハ玉藻刈てとりつゝ同じ
ゝをつくしれ巻
よろこびきこえゝる 二のむら 左 るハゝの猥
人の程ゝそ 十二のひら 左 人の程とハ紫のゆかりれ心の程あり心ゝ覚えハかゝれど
も常ふるまうゝの移ひつゝるふるまうてゝとをゝ我人の程のうゝとはし
きとあり優なる古詞あり抄の伝ゝ若源の古人あゝバ古ゝろと

ゝをつゝべゝれ
かゝとあり名ゝるとおゞきゝ。 十四のむら 右 名ゝる一本ふゝめとあるをふ指ゝはし
と定められるハいゝゞ名ゝるハ上のゞの結びゝて下れおゝきゝるゝのゝるを
衍とすべゝ
いひけちすゝくゝるゞ。 十八のむら 右 ゞハゝの猥あるべゝ
きまゝとふいつゝくゝゝ。 廿のむら 右 一本ゝの字ふれゝろゝ
ゝるゝゝありな 廿四のむら 左 かゝゝゝして句きるべゝ 湖月猥ゝ
うつゝゝてすゞくさんをおゝもゝゝんも 廿七のひら 右 おゝふゝとあゝゝゝを猥
ゝゝ
ひゞゝゝに 廿のむら 左 人ゝゝとゝゝ後ゝるべゝや

てふ渡しまうてんとおがれ（廿七のむら 左）一本おがれるとあり

ゐるうのまを（廿八のひら 右）上よりてふうしまうてんとあるをうけて二条

院へのまゐる傍注倶也

蓬生巻

竹のうのあれうれふしを（二のむら 右）比紐下のあぐさ矢結の上ふあるべし

つし侵るべし紐を苔ふするも見あるまゐるべし

ふるるよしあく所うし

比宮をハふるうれ拍よふくすぎて（六のむら 右）一本えすぎてとあるうし

結侵おとひしいちめのとごのこと（七のむら 左）一本おの字おしのこをばうとこれ

ふうしれどうくども（七のむら 左）比下よつどひをうれだおとつ紐れ

落しあるべし

と記くこくふるうこ世結て（八のむら 左）結へてあるべし渡らしめをうてと

いふうどし

思きりふをとこ女（九のむら 左）きりよる句切するうし下へつけよむ歌

しいづまよこみ志をうんこまきんとてづいまよしうしることを

いひて常陸宮のまづまりてゐ結よえこくべきせうるあり

年ごろあしぬさまあるれさまを思しいこきるをおもひおぐ

同 一本比下よりの字あり上のをもじのとあるうきくべハ下のをも

じのくあるべし

哀ふおがつうおくて（十一のむら 右）おぼつうふうでとあるしを侵まるあるべ

しおがつらなくてしくして宮の方のるとする時そ哀ふとつふことときこ
えぬあり
うしろやすくをと 十九のむら 左 注の仮もとうりろろしふ橋の仮らいぐく
ゑらげうあろちんうる橋ふさしうに迫るしもくとふるあるべし

関屋巻

あひなのさうしらやあじどそ 終のむら さうしらハ空蝉をつくるゆてうもさ
紀の寺の絹あり あじどそとつふことを二つ重ねさるハ時の詞よあしねぞ
あり おなるハ吉野よ向ひていふ詞後なるハ源氏ときこえさり

繪合巻

おうしときうしめして 十の巻 右 上下ヨ脱あるう又ハきこし免仮とあ

ふしをを伝まる歌
からのきをだいして 十二のむら 右 陪してうふら角りうまうるをふべし
え〻せつくさぬあれば 十八のむら 右 ゞ〻ゞ少ゞの誤あるべし
命さいまひ 十九のむら 左 命と福分とかくと三つあしぶをふ
本ざいのうしくの物 同 かざんハ上ふいへる学問又ものかくふ同しそのかざ
いあしぬ竟の雑藝といふうあり
世の人ちろ思ひきこえさせ 廿一のむら 右 喪の人ものとあるべきところあり
おほえおきるべき 廿二のむら 右 兄え壓さるべれあり
さるべ紀兄舎九 云 同 左 兄ハ源氏君一人のほんをふよあしず其ほ代の
すべての紙あり 天子ハ幼くまましてゆ何の上ハ主ちしてうけて

いへまかくこぎれば上へのつゞれ又下のおとゞぐで釈といふ詞あゞやうあるべし

傍注ろろ

松風巻

ちゝゞつくまゐるをむんど（四のひら 左）ちゞゞくあるべし

くちをゝゝぬんのゝゝい（五のひら 左）上下のれ不とのの三字一本よりあれを

ゝゝとん

おこあひかるまゝゝゝり（七のむら 左）まゝゝとゝふこと特ハ一ぬゝゝゝゝ

ゝゝれ

呼いれて又（八のむら 左）行てよ活てをゝ稱ゝり

とかゝおぼゝゝゝばゝる（十二のむら 右）さばゝるハはゞゝるを猥まるあり

薄雲巻

つゝれ不おゝく（二のむら 右）ゝゝれ句きるゝろ

あゞれゝ（四のひら 右）的石上をかどれゝる詞あり俗ゝちをゐと云ゞ姫

あゞれゐと（七のひら 右）一本あゞきゝゞゞあるゝろ

ちゝれゝゝ（十二のむら 右）ハこよゐゝ もとのれすゝゝるむゝゝる詞あり細

小明石上をゝきゝゝゝハゝろ

呼あれきゝねこん（十二のむら 左）をちゝゝゝハ中ゝよんおきてゝくゝゝまゐへとゝふ

ゝゝゐハ行のすもとまゝてねてゝんとあり乞ハゝときゝゝゝたハれてゝ

くゝゝこのゝくるゝゝあり御よゐゝゝゝとあるをゝるべし

天べんゐきりゝ（廿四のむら 右）一本天べんゐゞゐきりゝとあるゝろ

○ゐけをゝ補き上

故院のれいをまもりて見てもうしろめたく　同左

きとなりとなり

かくるゆの例をあらそりやときうん　廿七のむら右　小樽よりさせる一本よこひ

きうんとあるゆゑ見えし上のぴぴとかさなるまり

あまりこの例あらそり　同左　一本のもしるなし　ゆゑ

こちらはりもんと　廿八のむら右　は下にもんの二字落るべし

そのころの　廿二のむら左　ころハことを張まるべしとハるまり

時くよつけて見たまふふ　廿三のむら右　見ゆふるふとあるべき詞なり　よて

まて旬きるころ

朝臣巻

人のなめぬとさうゑ　四のむら右　かくる老人よ向ひ居ておうくとしくるゆを

きくハ何の奥あるゆもおくくのゑむまし記ゆ式とまり　湖月師

説とさぶといふようかきびし

いまふ見ふきまふ　四のむら左　一本いまにをいふふとせうぶ根の考への如し

あかぢふ字えを　六のひら右　を引てきびし下へつづけるむべし

さるハるるるを　云云　同　花の由説大うるよ　但し源氏君

廿年の程よりハるるうゑ初びるをしゆへどれ位の程よあハせて若く

まりまんなよりよ昔よりハゆまめうし記けのそひて見て引ふとこ

ふまぐるる　云云　九のむら右　かくるる面ゆるふうぐるくとふるゆなりうよ

づうた子め記るるんのうハるぬをいふまり

ふろ〳〵くおほ〳〵たなり。（同左）りハぷの俗なり

あるるぶごとく〳〵きを（十二のひら右）ふく〳〵とハさ〳〵うめるるさまをいへ

るるべし

こそとせのあるとする（同左）老者の物よ古院のうのこころちをバんこと

ホやんとあく（云云）とあるかどもて古院崩御のあをさたるハまれ

ふうされバナ年のあるとあるべし偖当るるべし

かよごとまらあ〳〵ん（十六のむら左）注そバまきふ〳〵ふくくの心とくるハたぐを

弟子地まそ。ぞてうるくのいふ慈くぐのるまらあ〳〵んきこえざり〳〵とこ

人づてのいい〳〵く（十七のひら右）上のきこえるふふり。一句よつづけよむべし

ふりぐ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ハすべて俗よおろ〳〵ず

といふをあり。傍注ろろ〳〵

んぐせくよとうつ（同）人をよごりて上ろうつづけよむ説ろ〳〵

いうるひてる（云云左同）欲のををうけて。ふく云つづけ〳〵ふ

をとめの巻

いと哀よ（三のむら右）比紙ハ草子地まそ。下のほめきこえるふへつづけるぶ者と

いふふう。女五宮の比紙ぶ。比紙ぶ者のハうくおとおびへつづけを

おかあ〳〵ふ〳〵けとを俗（云云左八のむら）おほあく。こまそハ俗よをふ

奇特よといふ如し。学校の中まそハ貴賤よかく〳〵ぶ。齒と徳とを

半び。師を弱ふといふ儀式を行へるさ如ふ。されバかく位さうれ

くをのんゆうびなぐ。志ひてつとめてうはけをとう俗へるを。

猶その非違をとがむるなり。おろすハ貶の字のこゝろにて、俗にもちゐるといふにあたるべし。すべてこの所ふる記注どもも大小解あやまりあれど、又小補も心得られじとみえたり

そなはざひざりに 同 そなはざハ古語にて、この頃にハ常ハいはぬことなるを、大学の衆ハ書籍（フミ）にて耳なれて此詞をつかふがをかし記なり。ひざりハ今俗に法外といふ意ときこゆ

何某をもしらで 同 なまよしハなまづかしの意をえたるなり

座を引て立さらびなん 同 たゝびハ語づかひの語ハせゝ立侍りなんといふ事をいへるなり

もろせのかへさるべきふしぐをひいで 十二のうら右 もろせのおしくへして

難じなじるべきふしをいふ。注さかへり

おしのことはふをさる 左 同 そゝて向きるころし。下へつゞけよむべし

世のひがものにて云 云 同 老宮巻 十のうら にはおほやけすぢにそしらるゝものゝ

師尤云 云とあると似たることなり

さるにてもかゝることなんとまうせすひて 廿三六四のうら このことを宮の家にしらせすひてなり。注ハひがことなり

叉まさざれる所 廿五のうら左 一本にすじなし。是もいらぬあらん。おほふに事にまなるべきか

くつしいて 廿七のうら左 くしいてといふ例なり。おほふに屈しとかけるをかなにかきなれとてあやまりたるか

おとでもきるべきさまふきこえて 四十九のむら 左 一本よかくあるべし・俗よ可
然清撰抄に作り上て・といふとあり
いろふ芝〜出らん 五十のむら 右 傍注ひげるあり・毛ハ后の誤にて・源のい
うに古のすを芝〜出らんとおぼゆとあり

玉蔓巻

こゝろをやすていひそる 五のひら 左 での下ふぞるべし・ぞとぞ・
形似さる故ふ蔓〜あるべし
き〜ついき〜 七のひら 右 き〜繼つゝあり
物うらぐひハおほかり。 十のひら 左 ハるを誤まるあり
あはられるゝびゆん・とあんこのふ 廿六のむら 右 ゑ誤ふるとうゑ誤ふと

うあ〜〜あ〜ん
おふるこゝろの 廿四のむら 右 こゝろハ菱なるべし・つるの長きゆゑ名の主ハ水栗ゝ
んらぐつとふ〜ぐふ 四十のむら 左 ふ・ハで・の誤なるべし
うさも〜〜ふる紀ゆのつ紀たまくる 四十六のむら 右 るゝぐよ向きるゝろ〜・下へ
づけふむべし・ふゆ
まるゝもひげるゆあり
をつ〜紀悔ゝあり 四十六のひら 源の氏綱あり・悔ゝハ誤にて・一本よきこと
あるふゝるぐふべし

玉小櫛補遺上巻